青春スクロール 私の母校

大阪府立高津高校②（大阪市）

同級生のまぶしさが刺激に

「阪神タイガース優勝の翌日には阪神のはっぴで来る人がいた」と思い出を話す古川昌希さん

古川昌希さん（30、2006年卒）は、近畿圏をエリアとする朝日放送テレビのアナウンサーで、夕方のニュース番組「キャスト」を担当する。「同い年の子とは思えない集団に飛び込んだ感じでした。大人っぽくて華やかで」と当時を振り返る。

会話のテンポが速いのにまず驚いた。入学して間もなく「おまえはボケとツッコミ、どっちやねん？」と切り込まれた。知識の幅や深さにも舌を巻いた。通学の私服もおしゃれだった。流行にはとらわれず、個性を出していてみんなバラバラ。

「それぞれの中学校で中心的存在だった人が集まってきた感じでした。自分の出る幕はないなって思いましたね」。中学のときに府の弁論大会で入賞し、人前で発表する楽しさを感じた。そこからアナウンサーになりたいと思った。先を見据え、マスコミ業界に強いといわれる早稲田大学を目指し勉強に励んだ。

文化祭で他校からもファンが押しかける人気バンドがあった。会場に人があふれる中でみんなを盛り上げる。「人を引き付ける圧倒的なカリスマ性に衝撃を受けました。今でも彼らは『なりたいと思う人間像』の一つですね」

中川潤子さん（63、1974年卒）も、同級生に圧倒された一人。定年まで電機メーカーのシャープに勤め、技術部門との橋渡しをし、商品企画に携わった。女性誌「日経ウーマン」が選ぶ「ウーマン・オブ・ザ・イヤー2007」の一人に選ばれている。

シャープ在職時代に開発した商品を持つ中川潤子さん

「とにかく何でもやってしまおうと、はじけたんですね。高校時代は家が厳しく制約も多くて、周りの人がうらやましかった。一歩前に進めば違ってくるのだろうという気持ちは、ずっと心の奥にあったのかもしれません」（中田美和子）

「女性もハキハキしていて賢い人が多いというイメージ。気後れする感じでした」と言う。週2回茶道部で活動し、淡々と高校生活を過ごした。「すぐに結婚して専業主婦になる」と思われていたようで、同窓会ではその後の経歴に驚かれることも多いそうだ。

学生が政治や社会の変革を求めて盛んに活動していた時代。卒業式では卒業生代表が答辞の代わりに演説を始めた。「自分にはとてもできない。でも信念を持っていて、かっこいいなあと思っていました」

大阪府立大学経済学部を卒業して入社したシャープで、女性デザイナーの活躍に刺激を受け、商品企画への興味が高まった。市場調査や消費生活アドバイザーの勉強をして、機能や商品を売る対象を考えた。スマホのない時代、携帯電話にウインドウズを搭載し、スライド式キーボードをつけるなど画期的な商品を企画した。

青春スクロール 私の母校

大阪府立高津高校①（大阪市）

「自由」の楽しさと怖さ知る

「高津には世間の常識を笑う空気があった」という二宮由紀子さん

「高津高校は、私が初めて卒業するのが悲しいと思った学校。こう話すのは童話作家の二宮由紀子さん（62、1974年卒）。「あいうえおバラダイス」や「ハリネズミのプルプル」シリーズなど、リズムとユーモアにあふれた作品で知られる。

小中学校では「みんなが一つの方向を向く」学校というシステムに慣れなかった。高津は違った。制服はない。教室の席は自由。先生のことは「さん付け」で呼ぶ。生徒を大人として対等に扱ってくれた。特別なことはなくても「毎日がキラキラしていて楽しくて、お祭りのようだった」。

「振れ幅の大きかった高校時代」というヒロ寺平さん

理系だったが、3年のときに英語がおもしろくなった。きっかけは、イギリスの伝承童謡集マザー・グース。自身の作品に流れる「お笑い系ナンセンス」のルーツは、ここにあると言う。

アガサ・クリスティの推理小説に出てきて、小さいころに見た絵本の記憶がよみがえった。英語の先生が童謡の貴重な音源をコピーしてくれた。1年浪人して京都大学文学部英文学科に進む。

「素直で正しく明るい」だけが子どもらしさではおかしい。子どもはいずれ大人になる存在で一人ひとり違う。常識にだまされず、自分の頭で考える。これは高津で学んだとも言えます」

大阪のFM「COCOLO」でDJを務めるヒロ寺平さん（66、70年卒）は「プラスにもマイナスにもなる『自由』の怖さを思い知らされた」と言う。

洋服も髪形も自由にしてください。早弁あり、自主早退あり、ペナルティーは一切なし。「死ぬほど喜んで楽しんで遊びほうけて。気がついたら学年のごっつう後ろのほうを走っていて、うわーっ、どうしようって」

大阪弁でいうところの「いちびり（目立ちたがり屋）」。バンドを組んでリードギターを担当する。ベンチャーズやビートルズが入ってきたころで、のめり込んだ。オーディションに通り、公開収録番組にも登場した。

一方で、学年末ごとに留年の恐怖と闘っていた。1学年500人で、年に20人ほどが留年していたそうだ。「やってもやっても、何で成績が上がれへんのやろう？」。すべてから逃げ出したくなった3年の秋、誰にも告げず数日間、北海道に行ったこともある。

それでも無事卒業し、大学に進学。カナダで仕事をしながら語学を学び、英会話講師や楽器卸売商社などを経て、85年からDJを始めた。

「振れ幅の大きい3年間でした。でも大人になればみな、基本自由で全責任を負って動く。高校でこういう学習ができたのはすばらしい経験だった」（中田美和子）